**〔解　説〕**

享保三年（一七一八）大坂豊竹座初演。近松半二作とも言われていますが作者は未詳。全十段の時代物で、豊臣家の滅亡を扱っていますが、時代設定、人名は鎌倉時代に置き換えられています。現在上演されるのは、ほぼ七段目のみとなっています。

**〔三浦別れの段　あらすじ〕**

　北条時政（史実の徳川家康）の娘時姫（千姫）は、敵方の武将三浦之助（木村重成）を慕い、三浦之助の母の世話をしています。討ち死にを覚悟した三浦之助は母に別れを告げに戻るのですが、気丈な母は会おうとしません。再び出陣しようとする三浦之助を引き留める時姫、敵方である父時政を討てと時姫に迫る三浦之助。武家社会の非常に翻弄される男女、親子の姿が描かれています。

 (一般社団法人　義太夫協会発行)

**三浦別れの段**

　過ぎ。されば風雅の歌人は、恋とや聞かん虫の音も、沢の蛙の声々も修羅の巷の戦ひと、身に引きしむる兜の緒、若宮口の戦場より一文字に取って返す、心はさらにおくれねど、もし落人と人や三浦が孝行の、念力通ず母の軒

「嬉しやこゝぞ」

と、気の張弓、はじめてがっくり門口に、かっぱとぶ物音は、胸にこたゆる二世の縁、心時姫走り出で、見紛ふ方なき武者ぶりの

「ヤア三浦様か」

と、駈け寄って、抱き起さんも大男

「コレ時姫でござんす」

と、云へども正気あら悲しや、詮方なく間もあり合はす幸ひ気付の、注ぎかけたるの、一滴五臓にしみ渡り、むっくと起きて

「母人はいづくに」

「オヽお気が付いたか、なつかしや」

と、鎧にひしとすがり付く

「ムヽ思ひ寄らぬ時姫殿。こゝへはどうして。問ふ間も惜しや母人に対面せん」

と行くを、引き止め

「時姫殿とは聞えませぬ。なんぼお嫌ひなされても、わたしはお前の女房ぢゃ、夫のかはりに母様の介抱に来たが、なんの不思議」

「ムヽすりゃこのほどより付き添ひいるか、シテ母人の御機嫌は」

「いま、すやと〳〵となって」

「お食はどうぢゃ」

「アイなに差し上げても、いやとおつしゃる、けさはやう〳〵粥の湯を少しばかり」

「ハア聞きしに違はず、それでは御本復覚束ない」

「サアされどもお気の御実証なは、独参とやらの力、薬のはのあたり、いまお前のお気の付いたも」

「さては母に与ふる薬で精神すゞしくなったるも思はず知らず親の御慈悲、ハア勿体なし、〳〵。お休みならば、お寝顔なりと拝まん」

と、母もわが身もこれぞこの一世の別れと思ふにぞ、さすがの勇気も、恩愛の肉身分けしはら〳〵と、先立つ涙にて

「物音響かば驚き給はん、静かに〳〵」

と、心鎮めて病所の口、立ち寄れば、母の声

「嫁女々々」

「オヽ嬉しや、お目が覚めましたか、三浦様のお帰りぞや」

「義村参上仕る」

と、明くる隔てを、はたとさし

「ヤレこの障子明けまい〳〵。そも三浦が帰りしとは、坂本の城へ帰りしか。よもこゝへ来る三浦ではあるまい。そりゃ人違ひ、もしまた来たがなれば、京鎌倉両家分け目の大事の、戦場に向ひながら、さす敵にうしろを見せる、うろたへた性根ならば、子でないぞ、サ親でない。母は病ひに臥しながら、日ごとに人の取沙汰を、余の名は聞かず、わが子はいかに三浦は手柄したるかと、仏神に祈誓をかけ、おのれやれ、はやう死んで未来の夫に、わが子の自慢せんものと、の楽しみ心の嬉しさ。その未練な倅がありさま、なんと夫に話されう。もはやこの世で、顔合はす子は持たぬぞ。このの内は母が城廓、そのおくれた魂で、この城一重、破らるゝならサ破って見よ」

と、の理をこめて、引きかづいたるのうち、泣く音よりほか答へなし。母の教訓肝に銘じ

「ハヽアその御詞忘れねばこそ、故郷を出でゝ今日まで、一度便りもいたさねども、御命も危しとの噂を聞くに胸せまり、で御無事な御顔を、たった一目拝みたさに、くらんで侍の道を忘れし不調法、御病気のお気をもます、不孝を御免下されかし。いで戦場へかけ向ひ、華々しき高名して、追っ付け仕らん、その時めでたく御対面、お暇申す」

と、立ち出づる。時姫慌て抱きとめ

「のうコレ、待って下さんせ。せっかく顔見た甲斐もなう、もう別るゝとは曲もない、親に背いて焦れた殿御、夫婦の固めないうちはモどうやらつんと心が済まぬ、短い夏の一夜さに、忠義の欠くることもあるまい、これほどまでに付き慕ふわたしが心、思ひやってくれもせで、心強や」

とに、うら紫の色深き

「ホヽウ切なる心は察したれども出陣は延ばされず、夫婦となるは凱陣の後しばしの間と相待たれよ」

「イエ〳〵それでも」

「ハテ聞きわけなし。放されよ」

と、振り切り〳〵駈け出すを、また抱き止めて

「三浦様。追っ付け凱陣とは偽り、お前は今宵討死に、行かしゃんすのであらうがな」

と、云ふ声

「高し」

と口に手を、覆へど、止まらぬ涙声

「イヤ〳〵〳〵、これが泣かずにゐられうか。討死の門出には、忍びの緒を切ると聞く、ことさら兜に名香の、薫るは兼ねてのお物語、思ひ切った最期のお覚悟、わたしもお前に連れ添ふからは、何の未練に止めやせぬ〳〵、なぜ、あからさまに打明けて、『この世の縁はこれ限り、未来で夫婦になってやろ』と、一言云うては下さんせぬ、やっぱり敵の娘ぢゃと疑うてかいの聞えませぬ、父上のことは打忘れ、日本国に親といふは、奥にござる母様より、ほかにはないと思うているに、あんまり気づよい三浦様、お前を先立て、後にのめ〳〵生きている、時姫ぢゃと、思うてかいの」

と、身をふるはし、つもり〳〵し憂さ辛さ、鎧の膝に夕立の涙汲み出すごとくなり

「ホヽウよい推量、いかほど親切を尽しても、三浦が疑ひは晴れぬわやい」

「アノまだわたしに疑ひが」

「オヽ晴れぬ仔細云ひ聞かせん、ガ、それも益なしもうさらば」

「イエ〳〵待たしゃんせ」

「イヤサ放せ」

「イヤのうコレ、長う止めはせぬわいのう、どのやうに思うても、あのおやつれなされよう、もう母様はけふあすのお命、なんぼ潔うおっしゃっても、討死と聞き給はゞ、お歎きが思ひやらるる、今宵一夜は夜伽遊ばし、同じことなら御臨終の後で死んで下さんせ」

と云ふも、泣く〳〵義村も

「父母に受けたる身体、死目に逢はで別るゝか」

と行きつ戻りつ取つ置いつ、またもや咳の声すれば

「これこそ声の聞き納め」

と、思へば弱る、うしろ髪

「せめて暫しはよそながら、万分の一の恩報じ、御薬なりとも温めん」

と、心の内に繰る数珠の、涙忍びのら、短夜

**〔解　　説〕**

天保九年（一八三八）大坂稲荷東の芝居初演。伊勢の古市を舞台にした夏狂言の代表作です。

**〔あらすじ〕**

福岡貢は武家の生まれですが、今は伊勢にきて御師（下級神職）となり、旧主今田万次郎が紛失した青江下坂の名刀を捜しています。刀は手に入れたものの、その折紙（鑑定書）が見つかりません。

古市の遊郭油屋のお紺は貢と相愛の仲ですが、客の徳島岩次が折紙を密かに懐中していることを知り、岩次に身をまかせると見せかけ、折紙を手に入れようとします。

お紺と岩次の盃事が始まりました。そこへ貢がやってきます。お紺の気持ちを知らない貢は激怒し、お紺からは別れ話を持ち出され、遣り手の万野からもなぶられ、油屋から追い出されてしまいます。一旦引き下がる貢ですが、その恨みから妖刀・青江下坂に取り憑かれたように、油屋の奥庭で次々と人に斬りつけてゆきます。

**油屋の段**

納戸へ持って入る

お紺は過ごす無理酒の酔ひに心も乱れ足

「岩次さん〳〵」

と呼び立てられて出て来る岩次

「ヲゝ岩さんとした事が、座敷を外してお前はどこへ」

「アゝイヤ、一寸に」

「アノマア嘘ばっかり」

「エゝ何の嘘を言ふてよいものか、証拠人は、、万野、ソレ用意よくば早これへ」

と云ふ内奥に声高砂

〽相に相生の松こそ目出度かりけれ

北六万野が取り〳〵に、とさん盃、硯、銘々に携えづさへて

「サア〳〵申しお紺さん、岩次さんの固めの盃、色直しはすぐに床入り」

「サア〳〵役はこの北六、嫁君から呑んで差し給へ」

と無理に突き付け注ぎかくれば、堪へかねて駈け出る貢、お紺が盃引ったくり、落花微塵と投げつけたり。

「ヤイお紺、おのりゃこの盃しては済むまい〳〵ぞよ」

「オゝ誰かと思へば貢さん、お客と盃するがどうして済まぬへ」

「イヤサ、一通りの盃なら格別、この盃ばかりさす事は、ならぬわい、コリャお紺、おのりゃこれ迄言ひ交わした事皆忘れたな。モ最前から見ていれば、ほてくろしい座敷ぶり、エゝもう了見が」

と立ちかかるを、岩次は引きのけ

「ヤイ〳〵〳〵かす禰宜の大馬鹿者め、身が揚げ詰めの女郎に指でもささば頬でも、脛も、ぶち折るぞよ」

と云ふに、万野がしゃしゃり出で

「コレシコレ貢さん、お前はんマアこちの内へ、が許してござんしたへ。お前の様な油虫はな、顔見るのも胸が悪い。アイ、が悪い。サア〳〵〳〵とっとと去んで貰ひましょ」

とずっかり言われて、猶急き立ち

「コリャ万野、わりゃマア味な事云ふな。この貢が女郎の油をいつ吸ふた事が有る。サア〳〵、それ聞こう〳〵」

「アノマア白々しい顔わいな、コレシコレお紺さんへ、最前の文、見せてやらんせ」

と云ふにお紺が懐より、取り出し渡す以前の文、いち〳〵貢が見てびっくり

「ヤコリャコレおれが名を騙って、女郎のお鹿へ無心の状」

「何と覚えがあらふがな」

「イヤ、知らぬ。元より訳ある仲じゃなし。こんな文やった覚へはない、あた汚い、あのお鹿。風俗と云ひ、面と云ひ、しっかい猿芝居のお染、あんまり呆れて物が云はれぬ」

と悪口聞いて駈け出るお鹿、貢が前になり

「コレシコレ貢さん、最前から聞いていれば、お前さんはん余りじゃぞへ〳〵、アイ、私やどうでお紺さんの様に美しうはない、美しうはないけれど、顔でお客は取らぬぞへ。コレ、肝心の時にはな、ぐったり堪能さすによって、ついに一日お茶ひいた事はござんせぬ、お前もそれを見込みに、アノ万野さんを頼んでつけ文、その度々に、アゝコレ〳〵見なされ、この通りになア、二分一寸お貸し、ソレ又、この状に、三分貸せ、エゝまだここにあるわいな、ソレ見なされ、又一両いるのと、モ親にも聞かぬ無心をば、五度や十度の事かいな」

「エイ何を」

「それに今更知らぬとは、ソリャお前卑怯じゃ〳〵〳〵わいな、筆先でたらし込み、身の皮はいだ生き盗人、エゝ腹の立つ〳〵」

と、言ひつつ両手に胸づくし、引っつかむ、手をもぎ放し

「エゝ様々のたわ言、身不肖なれども福岡貢、そちらに無心言ふ様なおれじゃないわい、コリャお紺、これには何ぞ訳が有らふ、訳を言へ、どふじゃ〳〵ヤイ」

「ヲゝ、お前の内証の文が私の手に入り、腹の立つはコリャ尤もでござんす、ガ申し貢さん、お前と私が仲は、人も知ったサ仲ぢゃぞへ、金の要る事が有るならば、打ち明けて、かふ〳〵と言ふて下さんしたら、何ぼ甲斐性の無い私でも三十両や五十両の金、まんざら否とも言ふまいに、わづか、二分や三分のはした金、お鹿さんに無心言ふとは、モみす〳〵知れた、イヤサ見下げ果てた心じゃな、モウ〳〵〳〵色も恋も醒め果てたわいな、サそれじゃによってふっつりと、お前の事を思ひ切り、岩次さんになびくのでござんす、アイそふ思ふて下さんせ」

とけんもほろろに言ひ放す

「コリャヤイお紺、おのりゃ気が違うたな、おのりゃ。モ流れの身にも誠ある者と思ひ、取り交わしたる誓紙。まだその上に大切な、サア大事な事まで請け合ひながら、わりゃそれじゃ済むまいがな」

「エヽ、あた鈍な違ひました、イヤサア気が違ひました。アイ性根が腐りましたわいな、モウまい〳〵〳〵まい付かずと、早ふ去んで下さんせ」

と口には言へど、心には『ヲゝ道理でござんす、道理ぢゃ』と、言ふに言われぬこの場の仕儀、血を吐く思ひ押し隠す。知らぬ貢は腹立ち涙、傍に北六高笑ひ

「ハゝゝゝコリャおかしいわい、客が女郎の物して取るとは、こいつは新しいわい。コリャ新版じゃわい、ハゝゝゝゝこれが本の伊勢乞食じゃ〳〵」

と何がな当る憎て口、岩次も片頬にせせら笑ひ

「アゝイヤモ聞けば聞くほど馬鹿な詮索だわい。お紺が心底聞く上は、今夜中に身請けして身が女房、ドレ金の威光を見せうわい」

とお紺がひざを仮枕、脛ふん反らす傍若無人、見るに貢は歯ぎしみ歯切り

「チエゝ見違うた、アノここなどふ畜生。その根性とは知らず、大事を明かしたがエゝ無念なわい。とは云へおのれに限って、よもやその様な根性とは知らなんだ、エゝ知らなんだはい」

と、にらむ眼にはら〳〵涙、お紺が胸はなほ百倍。張り裂くばかりのせ苦しさ。涙紛らす、煙草さへ、炎にむせる思ひなり。納戸に始終立聞く喜助。刀を持って走り出で

「貢様、モウお帰りなされませ。悪い事は申しませぬ〳〵、サ、お預り申したお腰の物」

と差出す刀、ひったくり、腰に差す間も気はしゅらくら、刀の違ひに目もつかず、万野は傍へ立寄って

「コレシコレ貢さん、お前はんはもうそれでしゃべり仕舞ひかへ。ヲゝ気の毒やの、ヤコレシコレ貢さん、ちょ、ちょこちらへおいなんせ、サア〳〵〳〵早ういなんせ〳〵、エゝ、早うおいなんせと言ふに。ヤナニ、貢さんエ、最前から段々の失礼。サヽヽヽお腹が立たう、オゝご尤もでござんす〳〵〳〵。が、私に免じてどふぞ、堪忍して上げておくんなんせ、コレシコレ貢さん、なんぼお前が、やき〳〵〳〵〳〵思はんしてもソレ、の切れ目が縁の切れ目じゃわいな、アノお紺さんを恨みなさるゝ事は微塵も無いぞへ、お前のその素寒貧を恨まんせ。モほんに〳〵、お前の様な貧乏神、片時置くも家の不吉、サア〳〵サアとっとゝお帰り〳〵〳〵、アイようおいなはったエ。エ、何。煙草入れお忘れたのかエ、ドレ〳〵私が取って来てあげませう〳〵。サ、煙草入れ、持ってお帰り。エゝまだ他にお忘れ物、ナニ、お羽織、ハヽヽヽこれは私も気が付きませんでした〳〵。ドレ〳〵。ソレお羽織。お帰り去になはらんかいな。エゝ去にやがれ」

と突き出す門口、こらへかねて刀の柄、手にかけながら忠孝の、二字に引かれて喰ひしばる

「チェゝゝうぬ」

「ナゝゝ何じゃへ〳〵、歯をむき出し、をひねくって、アゝ何かエ、コリャ私を斬る気かエ、面白い〳〵、サア〳〵斬られましょ〳〵手から斬るけへ、首から斬るけへ、おいどから斬るかへ、サア早うお斬り〳〵、斬りなんせ」

「コリャ万野、おのれはなァ」

「何じゃエ、サア早うお斬り〳〵、エゝどっから斬るのじゃ、貢さん」

「ムゝゝ、エイ勝手にさらせ」

と道を蹴立てゝ立ち帰る。万野は後を見送って

「サア〳〵〳〵油虫の幕が切れた、岩次さん北六さん、これからは色直し、お床入りの玉子酒、お紺さんも一緒に、サア〳〵二階へ〳〵」

と言ふもそれ者の高調子

「イエ〳〵、わたしゃまだ岩さんに帯紐は得解かぬわいな」

「ムゝスリャまたなぜ〳〵」

「サイナア、お前の持っていやしゃんす袱紗包み、定めて色の起請か文、それ見ぬ内は疑ひは晴れぬわいな」

「ナニ、これか」

「アイ」

「アゝコリャコレ大切な、アゝイヤ大切な〳〵〳〵〳〵、金比羅様のお守りさ」

「サア金比羅様のお守りにもせよ、私に見せて下さんせにゃ、真実心が解けぬわいな」

「アゝ、テモ扨も、女郎と言ふ者は、マ疑ひ深い者だ、アハゝゝゝ、アゝ是非に及ばぬ、大切な品なれども、そちにしっかり預くるぞ」

「アイ」

『アイ〳〵合点』も一寸遁れ、嬉しさ恐さ、胴ぶるい、足を踏みしめ段ばしご、二階へこそは、上り行く。岩次は後に声ひそめ

「コリャ万野、身が刀を早これへ」

と言ふに、心得、暖簾の内、刀抱へて走り出で、渡すを取って、打ち眺め

「ヤア〳〵、コリャコレ身が刀ではない」

「ヤア〳〵そんなら貢が取り違へて去んだに違ひはない」

と言ふに北六勇み出で

「何だ、貢が刀を取り違へて去んだとは、天の与へ〳〵〳〵、これこそ望む青江下坂」

「アゝイヤ〳〵それが大間違ひだわい。最前秘かに貢が刀と身が刀、中子をすりかへ置いたに、取り違へて去にをったが本の下坂」

「エゝな、私が一寸一走り」

「アゝイヤ申し、そのお使ひは私が参りませう」

と言ひつゝ納戸を出る喜助

「ヲゝ喜助か、よく気がついた、貢に追つ付き、腰の物を取り替へて来い、サ早う〳〵」

と手に渡せば

「まっかせ合点」

と、駈けり行く。万野はに心付き

「コレ〳〵申し岩次さん、お前はマアめっそうなお方じゃわいな、アノ喜助はな、確か貢が譜代の家来じゃといな」

と聞くより岩次は興醒め顔

「サア〳〵〳〵壺じゃ〳〵」

「岩次さん、壺とは何壺じゃへ、水壺かへ、塩壺かへ、但しは子壺かエ」

「エゝコリャ〳〵万野、慌てな〳〵、と言ふて身共も慌てておるわい。コリャ〳〵万野、そちは喜助に追つ付き刀を取り、貢が刀と替へて来い」

「ハイ〳〵〳〵、心得ました、貢に逢ふて刀をたくり、きっとお渡し申しませう、ドリャ、一走り」

と身づくろい、褄引き上げて

「ヲゝイ喜助どん〳〵」

と声は先、体は後に心も空、足を早めて

「ハ、ゝ、ゝ、アゝしんど〳〵一寸待って、喜助どん、〳〵〳〵、ヲーイ喜助どん」

と走り行く。岩次は後を見送って

「万野が戻って来る迄は、皆を相手に二階で飲まう、サア〳〵こちへ」

と引き連れて、二階へ

**〔解説〕**明和八年（一七七一）大坂竹本座初演。近松半二らの合作で、全五段の時代物。当時衰退していた竹本座がこの作品の大当たりにより盛り返したと言われるほど、人気のあった作品です。物語は藤原鎌足親子による蘇我入鹿討伐を題材に、大和地方の伝説や謡曲、幸若舞曲などを取り入れ複雑な構成の大作となっています。

天智天皇の御代、蘇我入鹿は天皇派の藤原鎌足を失脚させ、自ら帝位につきます。入鹿は母が白い牝鹿の生血を飲んで生まれた為、超人的な能力を持っていましたが、爪黒の鹿の血と嫉妬に狂った女の血を混ぜ鹿笛に注いで吹くと、その力が失われるという宿命でもあり、ついにはその弱点を突かれて討伐されるのでした。

**〔あらすじ〕**三輪の杉酒屋の娘お三輪は、烏帽子折の求馬(もとめ) 〔実は鎌足の子、淡海〕に想いを寄せますが、求馬のもとに恋人橘姫が尋ねて来ます。求馬は、姫の後を追って三笠山の御殿にたどり着き、橘姫が入鹿の妹であることを知ります。求馬を追ってきたお三輪は、入鹿の御殿に入り込みます。求馬と橘姫の婚礼が行われると聞き嫉妬に駆られたお三輪は、女中たちにもいたぶられ益々逆上します。そのお三輪を漁師鱶七(ふかしち)に姿を変えて御殿に入り込んでいた鎌足家臣金輪五郎が刺し、入鹿を討つには嫉妬に狂った女の血が必要であり、お三輪のその血が愛しい求馬の役に立つことを言い聞かせます。お三輪は来世で求馬と添うことを願いながら息絶えるのでした。

**金殿の段**

れてぞ忍ばるる。

迷ひはぐれし、草の靡くを知る辺にて、息急きお三輪は走り入り

「エヽこの苧環の糸めが切れくさったばかりで、道からとんと見失ふた。さりながらここより外に家はなし。大方この内へはいったに違ひはない。エヽ誰れぞ来よかし。問ひたや」

と見遣る先より、おがぎに、しゃな〳〵と豆腐箱提げ歩み来る

「申し〳〵」

と呼び掛くれば、オット飲み込む合点

「オヽお清所尋ぬるのなら、そこをこちらへかう廻って、そっちゃの方をあちらへ取り、あちらの方をそちらへ取り、右の方へ入って、左の方を真直ぐに脇目もふらずめったやたらにずっと行きや」

「イエ〳〵私が尋ねるのは、お清どのとやらではござんせぬ。年のころは二十三四で色白にくっきりとした好い男は参りゃせなんだかえ」

「オゝ、〳〵、来たげな〳〵。それはアノお姫様の恋男ぢゃげなの。三輪の里から路追うて来たところを、なにがお局たちが引っ捕へ、有無を言はせず御寝所へぐっと押し込み、上から蒲団を被せかけ〳〵、アヽヽヽ宵の内証のご祝言がある筈と、暮れぬ内から騒いでぢゃ。エヽけなり、こちとまで内太股がぶき〳〵と、卯月あたりの弾け豆。豆腐の御用が急ぐに」

と喋り廻って、出でて行く

「サア〳〵ひょんなことが出来てきた。ほんに〳〵油断も隙もなるこっちゃない。大それた人の男を盗みくさって、何ぢゃいしこらしい祝言ぢゃ。余りな踏み付けやう。よい〳〵。ドレその代りどこに居ようと尋ね出し、求馬様と手を引いてこれ見よがしにいんで退けるが腹いせぢゃ」

と行かんとせしが

「イヤ〳〵〳〵はしたない者ぢゃ、とひょっと愛想をつかされたら、と言うてこのままに見捨てゝこれがどう往なれう。エヽどうせうぞ」

と心も空。登るきざはし長廊下、行き交ふ女中が見咎めて

「ついし見馴れぬ女子ぢゃが、そなたは誰ぢゃ。何者ぢゃ」

「ハイ〳〵、イヤ私は内方の、オヽそれよ、さっきのお清殿は寺友だち、奉公に出られてから久しう逢はぬ懐かしさ。ちょっと見舞ひに寄りましたら、これはマア〳〵よう来た。上がれ、茶々飲め、さうしてアノ煙草飲め、アノお上にはあた滅相なご祝言があると聞けば聞くほど涙がこぼれて、あたおめでたい事ぢゃげな、ほんに内方の様なよい衆のご祝言はどの様なものぢゃおのれやれ拝んでなり、腹癒よと、うか〳〵こゝまで参りました。どうぞお前方のお心で、その聟様をちょっと拝ましてもらうたら忝うござります」

と言ふ顔も恨み色なる紫の、ゆかりの女とはや悟り、『なぶってやろ』と目引き、袖引き

「マア〳〵そちは仕合せな。かういう折に参り合はせ、お座敷拝むという事は、女の身では手柄者。したがこちらが飲み込んでお座敷へ出すものゝ、アゝ何ぞさゝずばなるまいに、何と皆さん、いっそのことこの者に酌取らそではあるまいか」

「オヽよからう〳〵」

「アヽ申し、その酌とやらは」

「オヽ何の又そちたちが知ってよいものか。今こゝで教へてやろ。ム、幸ひこゝにご酒宴の銚子島台。あり合ひの聟君様には紅葉の局。梅の局は嫁君役。残りは介添へ待ち女郎」

と桜の局が指図して、いやがるお三輪に、長柄の銚子持たせ、持ち添へ

「マア盃は三つ重ね。嫁君へ二度ついで、左へ二足。コレ立つのぢゃわいの〳〵。エヽ何ぢゃいの。うか〳〵せずとよう覚や。三度目ついで聟君へ。アヽコレ酒がこぼれるわいのう。エヽ不調法な。サこれからが乱酒謡ひ物。これも嗜みなければならぬ。」

「サア聟さまが見たくば早う謡や。馬子の唄なら面白からう。ついでに振りも立ってしや。いやならこっちもなりませぬ。帰りゃ〳〵」

と引き出され

「サア〳〵〳〵何のいやと申しませう」

「サそんなら謡や」

「アイ〳〵〳〵謡ひまする」

と泣く〳〵も、涙に絞る振袖は、よ、よ、立ち上り

「〽竹にサ、雀はナア、品よくとまるナ、とめてサとまらぬナ、色の道かいなアヽヨ、エヽここなほてつ腹め、とこの様に申しまする」

と打ち伏せば、皆々一度に手を打って

「さてもきつい嗜み事。よい慰みで我々が、ほてつ腹までよれました。馬士どの大儀」

と言ひ捨てゝ行くを、驚き

「コレもうし、私も共に」

と取り縋れど、ふり離されては、がばと転け、寝ながら裾にしがみ付き、引きずられて声を上げ

「なう皆さん、お情ない。どうぞ私も御一緒に連れてござって下さりませお慈悲〳〵」

と手を合はせ、拝み廻るを、叩きのけ

「オヽしつこ、とても及ばぬ恋争ひ。お姫様と張り合ふとは、叶はぬ事ぢゃ、置いてたも。大胆女の躾をせう」

と耳を引くやら、脇明けより手を差し入れてこそぐるやら。つめりつ、叩いつ、突倒し

「サア〳〵これで姫様の悋気の納った。いよいよめでたいご祝言、三国一ぢゃ。聟取り済ました。しゃん〳〵、〳〵と済んだ」

と打ち笑ひ、局々ヘ入る後は、前後正体泣き倒れ、暫し消え入り居たりしが

「エヽ胴慾ぢゃ〳〵胴慾ぢゃわいのう。男は取られその上にまたこの様に恥かゝされ、何とこらへて居られうぞ。思へば〳〵つれない男。憎いはこの家の女めに見替へられたが口惜しい」

と袖も袂も喰い裂き〳〵、乱れ心の乱れ髪。口に喰ひしめ身を震はせ

「エヽましや、腹立ちや、おのれおめ〳〵寝ささうか」

と姿心も荒々しく駈け往き向かふに、以前の使者

「オヽそなたも邪魔しに出たのぢゃな，もうかうなったら誰が出ても構はぬ〳〵。そこ退きゃ」

と袖すり抜けて駆け入る裾、しっかと踏まへ

「コリャ待て女」

「イヤ待たぬ、ここ放しゃ〳〵、」

と身をもがく。つかんで氷の、脇腹ぐっと差し通せば、『うん』とのっけに倒れ伏す。刀つき捨て辺りを窺ひ、目を配る。奥は豊かに音楽の、調子も秋の哀れなる。お三輪はむっくりと起き返り

「さては姫が言ひ付けぢゃな。エヽむごたらしい、恨みはこちからあるものを却ってそちから殺さする。心は鬼か蛇かいやい。オヽ殺さば殺せ一念の、生きかはり死にかはり、付きまとうてこの恨み晴らさいで置かうか。思ひ知れや」

と奥の方、睨み詰めたるも、叫ぶもうはがれて、さも忌まはしきそのありさま。じろりと見やり

「女悦べ。それでこそ天晴の北の方。命捨てたる故により、汝が思ふ御方の手柄となり、入鹿をぼすのひとつ。ホヽウ出かいたなァ」

「なんと、賤しいこの身を北の方とはえ」

「ムホヽウそちが語らひ申せし方は、忝くも中臣の長男淡海公」

「エヽ、シテまた私が死ぬるのが、いとしいお方の手柄になって、入鹿を亡ぼす術とはえ」

「ホヽヽその訳語らん、よっく聞け。かれが父たる蘇我の蝦夷子。齢傾く頃までも一子なきを憂へ、時の博士に占はせ、白き牝鹿の生き血を取り、母に与へしその。やかなる男子出生。鹿の生血胎内に入るを以って入鹿と名付く。さるによってきやつが心をとらかすには、爪黒の鹿の血汐との相ある女の生血、これを混じてこの笛にそゝぎかけて調ぶる時は、実に秋鹿の妻恋う如く、自然と鹿の性質顕はれ、色音を感じて正体なし。その虚を計って宝剣を過ちなく奪ひ返さん鎌足公のご計略。物陰より窺ひ見るに、疑着の相ある汝なれば、不便ながら手にかけし」

との笛のに、たばしる血汐受け潅ぎ〳〵

「今こそ揃ふこの幻術。この笛こそは入鹿をひしぐならん。ハヽありがたや」

と押し戴き、勇み立ったるその骨柄、実に藤原の御内にて金輪五郎今国と鍛へに鍛へし忠臣なり

「のう冥加なや。勿体なや。いかなる縁での女がさうしたお方と暫しでも、枕交はした身の果報、あなたのお為になる事なら、死んでも嬉しい、忝い。とはいふものゝ今一度、どうぞお顔が拝みたい。たとへこの世は縁薄くと、未来は添ふて給はれ」

と這ひ廻る手に苧環の

「この主様には逢はれぬか、どうぞ尋ねて求馬様もう目が見えぬ、なつかしい、恋しや〳〵」

といひ死にゝ、思ひのの糸切れし。苧環塚と今の世まで、鳴り響きたる横笛堂の、因縁かくと哀れなり。今国不憫いや増しに

「せめて葬り得させん」

と背なにお三輪が亡骸を、追々駈せ来る荒しこども「曲者やらぬ」

と追っ取り巻き

「手取りにせよ」

とどっと寄る。当るを幸ひ、砂石の如くほり飛ばされ、『逃げ行く奴ばら余さじ』と、奥深くこそ追うて行く

※演者・時間等の都合により抜き差しがあります。